

視覚という題名を、ビジュアル—visual という言葉で、と考えていたが、今回の話はオレの専門、平面画像の話、その視覚的な話。ビジュアルという言葉は、視覚的という意味もあるのだけれど、少し範囲が広がり、ジャンルが映像、音楽、ファッション、と多岐にわたっている、広がりすぎている、これは適切ではない、画像以上の範疇はまかないきれないと諦め視覚にした。ビジュアルという言葉は現代風で格好がいいのだけれど、そう思っているのは一人合点かもしれないけれど、魅惑的なものの危険性を察知して・・・などと大げさかな。

日ごろから自身絵を描いている、何人かのヒトがわがアトリエで描いている絵も見ている。こんなときに、ふと驚かされることがある「絵は たった これだけで こんなに変わってしまうのか」「ここに ひと筆 入れただけで グンとよくなった」「そんな塗り方をしたら セっかくの絵が 潰れてしまった」こんな風に長い時間努力をし、こつこつ仕上げた絵が、たった一色、たった一筆でグンと変わってしまう、その変わり様が、いいように、悪いようにはさせておいて。視覚で体感した話、これらの画像をこの文の横に添付しないで文だけで表現するのはなかなか難しい。本来なら画像をいくつも並べ、箇条書きの説明文で話をするのが一番わかりやすい、わかってもらえると常々思っているが、あえて今回は画像なしで進めてみます。

とある会場で 100 人ほどが集まる会がありました。半年ぐらい前から「手伝ってくれ」と頼まれていました。幹事の人たちは社会的に優秀な方々ですが、視覚系というのか美術系というのか、には疎い方々です。えかきの仲間、美術系の人たち、美術を含めた一般芸術系の人たちと話す時には、説明も注釈も要らないような部分が、この人たちには通じない、言っている意味がわからない、こちらの言い分が通じないというようなことが多々あります。今回文集を作るのを手伝って欲しい、会場の看板も何とかして欲しい、というような要請が入りました。

まず看板、「たたみ 1 枚ぐらいの大きさのものが欲しいが、どうしたらいい、みんなで悩んでいる」看板は 1 万円も出せばパソコンで作った文字なり画像なりを簡単にプリントアウトしてくれる、「これは問題がない、急ぐことはないよ、直前でも どうにでも なるよ」と答えておきました。が「1 万円は 出せない、予算がない」ということで皆さんが集まった日の午前中に、300 円ぐらいの画用紙を用意。パソコンで字<〇〇学校〇〇年〇〇集会>なんてのを作って、手書きで画用紙に拡大して下図を作った「これを 絵の具で なぞって 色を入れて」「おお こんな作業が したかった」「手書きの 看板なら やったことが ある」だいの大人が嬉々として書き上げていった。

文集はたくさんの方が集まった。「先着順か、あいうえお順か」「添削は どこまでやるか、誤字脱字で 終えておくのか、てにおは まで 添削するのか」というようなことでもめたらしいが、あいうえお順で 50 人ぐらいの文章がパソコンソフトのワードで送られてきた。「印刷物にしたいので 手伝って」「冊子なら 5.6 万円の印刷代がかかる」「手間賃は 払えない」というような話で始まった。題字を高校の書道の先生をしている仲間に頼みたかったが「病人の世話で、できない」と断られた。「色遊びのインスタレーションで、題字を作ろう」ということで皆さんが集まった日に、白い画用紙に何人かが指に絵の具を付け、字を造っていった、これでもかと違った色の絵の具を付けて画面に押し付けた、なかなかいいものが出来上がった。パソコンで大きくしたり小さくしたり、色を変えたり、題字ができあがった。文章もまとまり、目次もまとまり、空いたページには写真も入れ、何とか格好がついた。400 部・28 ページ・フルカラーの冊子が出来上がってきた。

こんなことを貢献してくれたと、額入りの賞状をいただいた。お立ち台の上で、恭しくいただいた「賞状だけ ですが」「金一封 は」と冗談を言い合った。その賞状、よく見ると、仲間の書道の先生の手書きの文字、手造りの印、印肉も渋い赤色、「これは おいそれとは 捨てられない」とありがたくしまつてある。「デザインに 凝るといふけれど わからない なんでそんなところに 時間を 手間をかけるの」「君の絵はわからない」いつも聞くセリフ、まじめに返事もしない、笑うだけ「だけど いいだろう」「この色 この形 この空間」

前田良一著<役行者>を読んだ。若尾五雄著<鬼伝説の研究：金工史の視点から>これも先日読んだ。先生たちの話は、2000年前から日本人は金属を採掘して利用していた、日本の歴史の相当古い時代から鉱脈を見つけ採掘していた。日本は金属資源国だったらいい、今はもう無くなったが。金・銀・銅そしてレアメタルといわれる金属類も採掘していたらいい、それらの金属を採掘し、加工し、使っていた、また輸出もしていたらいい。が、近代現代になると、ほとんどの鉱脈が掘りつくされ、枯れてしまい、今の日本は資源のない国になっている。

かつての日本、佐渡には8万人、石見には2万人、出羽には7千人、生野には2万人という数字の人々がそれぞれの鉱山町に集まっていた。鉱山関係者といえば、経営管理のために幕府や藩の人、採掘職人、冶金職人、山師、労働者たち。その門前町には商人や手工業者、慰安娯楽の設備を持った施設とその中で働く労働者（これらの人々も労働者というのかね）が集まって大きな町を作っていた。今でも大きな鉱山の跡には、その痕跡や資料館が残っているが、小規模の鉱山跡ではその痕跡もなく、資料も残っていない。「ここにそういう鉱山があり、いつごろ・だれが・なにを掘って・なにを作っていた」というような話が全く聞こえてこない。郷土史の好事家がコツコツ調べるぐらい。

前田先生：全国各地に炭焼長者の伝説が分布している。貧しい炭焼きのところにある日突然、都のお姫様が押しかけ女房にやってくる。女房は炭焼きに小判を渡し町へ買い物に行かせる。途中炭焼きはカモ（鳥）を見つける。手に持っていた小判をカモに投げつけ捕ろうとしたが、外れて池に落ちてしまう。女房は手ぶらで帰ってきた炭焼きに怒るが、炭焼きは「小判と同じものなら裏山にざくざくある」と掘り出した。炭焼きは黄金の値打ちも知らない間抜けモノに語られている。都のものは炭焼きが黄金を持っていることを知っていた。炭焼きも知らぬ顔をして黄金を採掘していた。黄金を必要とする中央の権力者と、炭焼きとは、太いパイプで結ばれていた。この本を読んでいると、日本ではアメリカを始め外国での映像のように“ゴールドラッシュ”というような話はない。幾多の人々が目の色をかえ、黄金に群がり一攫千金をもくろんだ様子が見えてこない。日本の良民とされていた農民の目には触れないように、触れたところで採掘は「賤民のする作業」「センミツのヤマシの仕事」なので近づいてはいけない、まねをしてはいけない、というように洗脳されていたのかもしれないね。

前田先生の話では奈良の吉野にたくさんの鉱山があったという。黄金・水銀等がたくさん採掘されていたという。オレが去年歩いた“大嶺奥駆道”まさにその道沿いが黄金の道、山師の道、鉱山の町だという。山伏、修験者といわれた鉱山技術者がたくさん集まって仕事をし、生活をし、集い、遊び、笑っていた。あの山のあちこちに住まいがあり、坑道があり、たくさんの人が居た。というのが、水場の少ない山、冬は雪が積もる山、女人禁制の山、本当のところが見えてこない。<小笹の宿>ここは水がふんだんにある場所、大嶺の奥の院といわれ、40を超える坊舎が軒を連ねていたと書いてある。去年ここは小休止をして通過した、湿気が多い広い場所だった。

先生：「大嶺峯中秘密絵巻」という相当長い絵巻という絵図に、“大嶺奥駆道”全図が詳しく載っている。その中に“大天井ヶ岳”の中間に“小天井ヶ岳”が描かれ、頂上に「鍛冶屋敷」の書き込みと、一棟の建物が描かれている。これは鉱山の精錬所が実在した証拠ではないのか。鍛冶には“大鍛冶”と“小鍛冶”があり、大鍛冶は精錬所のこと、小鍛冶は鍋、像、刃物等の製品製造のことだそうだ。

古い文献に記述された唐への輸出品として、金・銀・水銀・硫黄・錫・銅・鉄をあげている。往古の日は世界有数の金銀大国だったという。私は金峯山の黄金伝説はあくまでも信仰に基づくフィクションであると考えてきた。吉野山（金峯山）の周辺では鉱山が操業し、実際に金・銀・銅を産出していたにもかかわらず「全山が黄金に覆われている」という吉野山には鉱山が存在しない。「黄金の山」の看板は真っ赤な嘘だったのか。いや私は吉野山は黄金を産したと思う。山伏は事実を隠している、実際には出土するが、産出しないふりをしているのだと思う。

東吉野村郷土誌：三尾鉱山で金の採掘、1970に休山した。大盛鉱山、小栗栖鉱山。丹生川上神社付近。

二十歳前後のころ、なにをそんなに怖がっていたのか。思い出すのが東京郊外の大宮、友人宅を「犬がいるので留守番して」と頼まれ何日間かその家に一人で住んだ。おそらく2.3日のことだったと思う、都市郊外の百姓屋、田んぼの真ん中にポツリポツリと家があった。夕方、篠つく雨が降り雷が鳴った。なぜか自転車で近所にてていた。稲光に驚いた、稲光やその轟音に驚いたのではなく、光に映し出される風景に、屋間何も思わずに見慣れていた田園風景、それがそのままなだけけれど、肝が冷えた。「炙り出された闇の中になにが居るといふのだ」とおかしくなるが、そのときは恐怖で引きつった、本当に怖いと思った、早く人がたくさん居るところに戻りたいと思った。今なら闇の中が一瞬稲光で明るくなり人がいようが獣がいようが、「おいたか」ですましてしまう、大仰に騒ぎ立てるとは、「おまえさんは女こどもか」と笑われそうだが、そのころはなにかにつけ自然の中は相性が悪かった、怖かった。ヒトが住んでいない所、人里はなれた森も川も海もいやだった。まして山の中なんてとんでもなかった。40歳頃から登山をはじめ、時には一人で山に入って、山で一人で寝ることもままあった、麓でも一人で何度も寝たが怖いと思はない。

先日、東北地方の画像でミイラを見た。日本にもミイラがあるということは聞いたことがあるような、という曖昧なことですましていたが、東北地方のお寺に祭られたそれらのミイラを知って驚いた。ミイラとは3000年も4000年も前、エジプトの貴族たちが死んでもなお、生前の姿で生前の生活をするために、己の遺体をミイラにして埋葬するように願った、それに答え、腐敗しやすい内臓や脳を取り出し、詰め物をし、身体を包帯でぐるぐる巻きにし、棺に収める風習があった。それぐらいしか知らなかったが、世界の他の地域にもたくさんのミイラがあり、保存されているのを知った。東北のミイラはこれらとはちょっと違って「即身仏だ ミイラではない」というお坊さんもいて、厳かに寺の仏壇に鎮座している。

この話をする前に“木喰”という言葉がでたので、木喰上人の話を一とくさり。40歳のころ、円空・木喰という二人の坊さんを知った。仏像を彫って日本国中を歩き回る坊さん。旅の途中、その土地の寺で木を見つけ、刀で仏像を彫りその寺に安置し、また旅にでた。それぞれの仏像展覧会を見に行った「すごくいい」と思った。二人の彫った木彫仏像はそれまでに見てきた奈良・京都の仏像とは違っていった。奈良・京都の仏像は、仏師の作品、しかも日本国御用達の大寺院が金に糸目をつけず、当代一流の仏師に命じ、荘厳な伽藍の中に似合う最高のものを造らせた。幼いころからそんなものばかりを見てきた目には「こんなに自由にこんなにおもしろく気軽に」と大いに感激した。特に円空仏は気に入った。今、木喰仏をあらためて見つめ「オレの昔の評価は違っていたかもしれない円空よりこちらのほうがいいかも・・・」と思っている。円空仏は、鋭い、空気が震えている、ぞっとする面白さが迫ってくる。それに反して木喰仏は、おっとり、まったり、温かみがジワリ伝わってくる、しかも非常に庶民的なさま、こちらのほうが売り物になる、みんなに好かれる、それがいいことだと思った。

話は脱線したが、東北にあるミイラとは失礼、祭られている即身仏の話。この話は300年400年前のこと、京都の比叡山の僧と同じように、百日回峰、千日回峰という厳しい修行をし「己の身体をミイラにする 即身仏になる」と決め、身体の中を絞るために、木喰修行までするというのだ。普通、僧侶は肉食はしない、禪寺の門に掲げられているように「不許葷酒山門入」ということで、精進料理はいいとされているが、ひとたび木喰宣言をすると、穀物を断ち、火で加工された食物も断つ、木の実や木の根等をのみ食べる日々を過ごし、しかも各地を廻り祈る生活を続ける。いよいよ身体が弱ってきて、死の床に就いたとき「いよいよやるぞ」ということで桶に入り地中深く埋めてもらう。空気、水の供給用竹筒が地上との交信。読経の声も、下からの合図もなくなれば、その竹筒を抜き、穴を生めた。3年経った時点で掘り出し、綺麗な衣を着せ即身仏としてみんなが拝む。いうは簡単だけれど、3年経って忘れられたヒト、開けてみると腐敗していたヒト、というようになかなかうまい具合にはミイラになっていないという話。その画像を見ると、姿かたちは外国のそれとはそう変わりが無いが、「オレは死んで仏になる ヒトを救う」という決意がひしひしと伝わる、厳かな姿だ。会いに行きたいと思う。

「いろあそび」と書くと「おお そのお歳で なかなか おさかん ですねえ・・・」などと誤解されそうですが、いや本当は、たまにはちょっとでもそういう誤解というよりも、そういう場面があれば楽しいかもしれませんが、残念ながら、期待させて申しわけないが、本当につまらないですが、と何故かくどい。オレがいうところの「いろあそび」は絵の具の話、絵の具の“色”の話です。

友人と「いつの時代が楽しかった？いつが一番よかった」というような話の中で「そらあ いま」「いまですねえ 今が一番」と答えながら、こういう問いにはいつもそういつている、このようなことを聞かれた時には「今」という答えはいつも決まっている。自己愛という意味では過去も現在も未来も自己には変わりがないので当てはまらない。なら、どう理由で現在という時間の答えがすぐに出てくるのかは我ながらわからない。ヒトが「いつの時代が楽しかった？いつが一番よかった」と問われた場合どのように答えるのか、いつの日か聞いてみたい、皆さんの答えが聞きたい。

某先生が日本の中でそれぞれの県民性を分析した話があった。日本人の気質類型を分裂質・躁鬱質に二分したうえで、さらにそれぞれを外向性・内向性の二側面から捉えている。その結果滋賀県民は外向躁鬱質で、加えてその性格は概して強気、嫉妬深くない、思慮深い、おおらか、寛大、・・・と次々続くが、こんなことをこのように分析するのはいかげなものかと思っている。しかしこの話が出たついでとっては先生に失礼だが、オレは分裂気質で外向性、内向性両面を併せ持っているのではないのかな。加えてその性格は概して強気ではなく弱気、嫉妬深くないはあまっているか、思慮深いというほうではないというよりも深く物事を思慮しない、ね。おおらか、寛大この辺はそうかもしれない、がしかし自身の分析、自分自身の採点評価はくだらないのでやめる。

今がいいと答えるのには、今という時間の中に“マイナス”の要因がないというのも大きな要素だろうね。肉体的に弱っている、弱っていることを感じかけている、感じている、感じてはいないが、人から指摘されるとすぐに暗示にかけられ、どっとマイナーな状態に加速する、という自分を考えてしまう、というような肉体的な話。小さいとも、大きいとも、組織や社会の中であって、自身の存在がヒトから指弾される。「こらあ 規則を守れ」「こらあ 犯罪を犯すな」「こらあ 金を払え」こういうのもいやだねえ。マイナーな要素がこれだけしか思いつかないのもよくないはなしかもしれないが、今はこれでよしとしましょう。そういうことを考えると「おまえには 今のおまえには 不幸がないのだ」と罵られそうだが、そういうことかもしれない。

えらそんなことをいったところで、「アートだ 文化だ 芸術だ」そんなことはくそくらえ「オレは まいにち まいにち いろあそび をしている」絵の具箱には 20 色ぐらいの絵の具が入っている、それぞれみんなすごいやつだ。ほんとうは絵の具は、絵の具屋には 100 色以上の絵の具が並んでいる、みんなそれぞれ少しづつ、微妙な感じで違うのだけれど、捨てがたい個性をもっているのだけれど、でも今はもう 20 色ぐらいの色数しか使わない、必要としない、買わない。オレの絞り込んだ 20 の色たちはそれぞれに絵の具箱で騒いでいる。20 色の絵の具たちは、胸を張って、腕を振って、色香を競っているが、それを使うオレとくは、彼らの尊厳も雄雄しさも女々しさも気品も中途半端に扱って、その色香をじゅうぶんに使いこなしていない。困ったものだけれど、オレはまいにちまいにち、その 20 色君たちと、遊んでいる、いろあそびをしている。そうなのだ、えらそんなことをいっても「アートだ 文化だ 芸術だ」そんなことはくそくらえ、絵の具君たちをちびっとパレットに出し、筆に乗せて、キャンバスに刷いている。その最中には、思考も感情も止まっている、

前にもいったが、文化は「言葉だ」と思っている。この“いろあそび”を言葉では説明しない、これは、行為・おこない、なんだ。“おこない”の結果、できあがった“モノ”は言葉で表せる。これが文化だ。これが人間生活だ。

修験者は鉱山師であった、彼らは山に住み鉱脈・鉱石を見つける、大きな火を燃やして鉱石を溶かし金属に変える、経験豊かな金属生産のプロであった、という本をいくつか読んだ中に、仏教が日本に入ってくる以前は、修験者は道教や神道をよりどころとしていた、という内容が何箇所かあった。タオイズム、ドラッグ、不老長寿という言葉がちらほら見えた。孔子は知っているが老子は知らない、孔子の教えは近代日本の考え方の大きな柱の一つだが、老子のことはほとんど語られていない、とも書いてある。老子、荘氏というヒトは好きだが、逆に孔子先生を深くは知らない、ということで調べてみた。

孔子：時代劇の映画の中、若者が声をそろえて寺子屋であつたり藩の学校であつたり、「シ イワク・・・」これが孔子の教え、儒教の教えであつたかもしれない。日本の近代は孔子漬けかもしれないと思う。オレの世代、戦争に負け世の中がひっくり返り「自由だ 民主主義だ」教えるほうにもわか勉強でそれまでの儒教や道徳が吹っ飛んでしまった時代、孔子や儒教は学校教育では習わなかった。孔子は紀元前5世紀の哲学・儒学者。礼（礼節）と仁（人間愛）すなわち、身分制、仁道を説いた、それまでのシャーマニズムのような原始儒教を体系化し、道徳・思想に昇華させた。論語は弟子たちの語録。儒教は中国思想の根幹的存在。

○そのヒトを知らざれば その友を見よ

○止まりさえしなければ どんなにゆっくりでも 進めばいい>>これは好きな言葉だねえ。

○過ちを 改めざる これ過ちたり

○良心に照らしやましいところがなければ 悩み 恐れるところなし

○儀（正しい行為）を見てせざるは 勇なきなり

○己 達（成就）するを欲するなら ヒト（他人）を 達しせしむ

○自分自身の誠実さ 他人に対する優しさ

○徳は弧ならず 必ず隣（同調者・協力者）あり

これらを読むと、さすがにいいことをおっしゃっている。これらの言葉を教訓に、肝に銘じて刻苦勉励したヒトがたくさんいた、反対にこれらの言葉を武器に、若者を先導、洗脳した先達も多かったのでは・・・孔子の世界は知らないのでえらそうなことはいえないが、オレは荘子のほうがいい、荘子が好きだねえ。

加島祥造著<私のタオー優しさへの道>老子：紀元前6世紀頃、哲学者、道教（タオイズム）創案者、反権威主義者、実在が危ぶまれている。老子著<老子道徳経>2500年前、中国語で書かれた。簡単で難解な5000文字、が残っている。加藤先生はこの本で、これまでの日本人の解説、解釈でわからなかったところが、欧米人たちの訳した文を読み、「老子の声が聞こえる 老子の声が響き 彼のメッセージが私に伝わると感じた」

○大道廃れて 仁義あり>>自然の道が廃れ 仁義ばかりが・・・>>すばらしい。

○多聞なれば しばし窮す 中を守る苦かず

○ヒトに与えて 己いよいよ多し 奉仕をすれば自分も豊か

○その長ずるところを尊び その短なるところを 忘れる いいところを伸ばし 悪いところを捨てよ

○大器晩成 ○上善水の如し 日本酒の銘柄だと思っていた、オレは無知だねえ。

本の中で、寺田虎彦がドイツ語訳の老子道徳経を読んで、「ドイツ語訳が原書にどれくらい忠実であるかは自分にはわかりかねるが、しかしところどころあたってみるとかなり在来の日本人の注釈などとはちがっていて誤訳ではないかと思うところもある。しかしこのドイツ語訳の方がともかくも話の筋がよく通っていて読んでわかりやすいことだけはたしかである。

「大方無隅（たいほうむぐう）、大器晩成、大音奇声、大象無形」というのを「無限に大きな四角には角がない、無限に大きな容器には何物も包蔵しない、無限に大きな音は声がない、無限に大きな象には、形態がない」と訳している。欧米人は詩としてとらえている、「教えであり 教訓である ヒトとして守り 知るべきである」とはとらえていない。また荘子が読みたくなった。

朝 7:00 茨木を出発 相・前・岡 吹田で増夫妻を乗せ計 5 名 吹田 IC より伊那 IC 伊那市街の蕎麦屋でカケ蕎麦 生協スーパーで食料調達 仙流荘駐車場 車の数は少ないが暑い、冬用ヤッケも持ってきたが車に置く、服を着替えバス乗り場へ 荷物代込み往復バス賃 2680 円 荷が横におけるぐらいすいている。運転手さんがガイド 花の名 木の名が出てくるが右から左 2000 キロの海を越えてやってくるアサギマダラという蝶の名は覚えた 2.3 匹飛んでいた 崖の下を昔 戸台から何度も歩いた 重い荷を背負って河原を歩いた、いつも澤山・河瀬のお二人がいた。2 年前はベニ・キヌちゃんらと来た 長衛荘のテント場 1000 円/2 泊 10 張りぐらい並んでいる 「曇っているので散歩はよそう 食事にしよう」 鍋材料が用意してある 火をつけ 湯を沸かし ビール・焼酎・ウイスキー・梅酒

Record より: 素晴らしい夜じゃないですか、真っ暗の中「空が見えますよ 雲の隙間から 満天の星ですよ」オレにはなんにも見えない 酔っている「車で 4 時間 バスで 1 時間 火を焚いて食べた 飲んだ 小仙丈はかすかに見えるけれど 星は見えない 明日はあそこを越えて てっぺんだ」「見えた 見えない もうどうでもいいか 暗闇の中 テントの中がボオ〜」「オレがいて 向こうにオレがいて その向こうのオレが話しかけてくる オレが蝶では話がうますぎる ボールにしよう ボールに目がついて話しかけてくる ここは地球 月 宇宙 回転していく」魚釣りの人がたくさん来ている「catch and release ですよ」北岳に登った両俣小屋で魚釣りやさんをたくさん見た「泳いでいたら、ひょろっと紐がきて、食いついたら異次元に持っていかれて、さかながさかなと向かい合って、わけのわからん世界にのめりこんで えらい迷惑な話じゃないか さかなにとって」ろれつのまわらぬ 声が続く。

Record より: 4:30 起床 昨夜はしこたま飲んだ 胃薬と睡眠導入剤で爆睡 夜中に大雨が降ったらしいが知らない「水はどれぐらいもっていけば」「1 リットルぐらいかな」真夏 10 時間も行動すれば 4 リットルは要ったが 朝の涼しさ 今にも降りそうな空 霧が立ち込め見通しがきかない 曇りのままならいいが 降られるといやだねえ

Record より: 6:30 出発 35 分で分岐 帰りは北沢峠に向かって降りると景色がいいらしい ポツリと小雨

Record より: ポツリ雨 霧の中 ブナ林 ヒトの胴体ぐらい その倍 その 3 倍 若々しいブナがぐいぐい立つ

Record より: 8:00 大滝頭着 馬の背方面は不通になっている 帰りはここからと思っていた ぽつりの雨 汗で中から 雨で外から ぼとぼととまではいかないが 出かける前の防水スプレーが利いている

Record より: 六合目少し広いところで小休止 森林限界が過ぎたのか木が低くなった「らいちょうに会いたい」

Record より: 9:30 小仙丈着 曇りと雨が交互に 薄日もさしている さあ天気 どっちにころぶか いざ出発

Record より: ごろごろ岩の稜線歩き 久方ぶりの 3000 メートル級 今は雨がやんでいる ギザラの鋸岳が見える 雪の白 ハイ松の緑 雪が残る夏前のアルプスはこの景色がきれい すばらしい

Record より: 11:00 仙丈岳山頂 降りだした 写真を撮って 早々に小屋へ バタバタ トタンをたたくじゃじゃぶりの雨の音 火を起しラーメンにうどんに 懐かしい風力発電 有料トイレ 前回はものすごくいい景色だった 全部見えた 今日のは鋸だけ 雪渓を登る若者パーティ もっと蹴り込め 滑らないよ みんないい靴はいている

Record より: 12:30 小屋を出た 1:20 小仙丈着 ガスがかかり雨が降り寒い 小屋の中 ダウンを出して着た

「高度が高いのでラーメンは芯があったね」「うどんも芯があった」パン「あれえ 大福もち入れ忘れた」「それじゃ みずようかん」「大福は明日のバスの中で」「ビールがまっている、酒も焼酎も・・・」「昨日の深酒 足が重い」

Record より: 「ザックのヤッケ出して」皆さんの荷を背負っていた「え 小屋でなんで出さなかった」「忘れてた 背中が冷たい 身体が寒い 冷たい」下りだして 高度が下がって 多少暖かくなってきた「なんで今頃」

Record より: 下界は晴れている 麓は陽が照っている なんだか廻りが見えだした 「あれは北」「いやあれは中央」「先日行った 北八つは」「北八つは はるか向こうにかすんでいる」「だんだん明るくなってきた 晴れてきた 暖かくなってきた 雲が切れはじめた 北岳が 甲斐駒が 中央アルプスが」

Record より: 「し〜 そっとして 動かないで」「・・・」「かみなりどり発見」「おおついに サンダーバード」「えらいちょうと違うの」道の近くで卵を抱いている じっとしている 「念願のらいちょうに会えた」

Record より: 4:30 北沢峠着 10 時間行動 よくまあ老人パワー がんばりました チョイ酒の補給 小屋で日本酒を二合 1000 円で購入 今日の鍋はちげ鍋 うまい

先日来読んでいる本の中に民間信仰・土俗宗教というような言葉がいくつか出てきた。これはいったいなんだろうと思っていた矢先、石毛直道著〈民間信仰論〉をみつけまずはパラパラ。民間信仰というからには既に多くのヒトに迎えられているカミサマ、日本には本当にたくさんのそのようなカミサマがいた。「これは知っている これも知っている」いろんなヒトに慕われ敬われ気軽に親しげに接しられてきた、そんなかたがた。神道、仏教、新興宗教とは違うなにかなのだろうとは思ったがそれが思いつかなかった、そうかこのカミサマたちだったのかと一安心。本の中に“お稲荷さん”と“巫女”の話が出てきた。「え お稲荷さんは立派な宗教施設じゃなかったのか」「巫女さん、あの霊媒師のようなヒト あれも信仰なのか」と思いつつおもしろく読んだ。

お稲荷さん：京都の伏見稲荷大社を中心に全国にたくさん散らばっている。江戸時代「町内に伊勢や稲荷に犬の糞」という川柳があったらしい。江戸の町には“伊勢や”という屋号の店とお稲荷さんとが犬の糞ぐらいに多かったという唄らしい。本来は農業神だったお稲荷さんが次第に衣食住の神に、商売繁盛の神として、大は大鳥居をもつ社から、小は家の棚の上のお稲荷さんにいたるまで、数百万のお稲荷さんが全国に散らばった。農業神の使者としてのキツネがお稲荷さんと結びついていった。

そういえば幼いころより“こんこんさま”がたくさん在った、鳥居があるお宮さんにも、街角の小さい祠にも、知りあいの家の棚の上にもキツネの置物があり、たまには好物のウスアゲが共えられていた。「なんでキツネ キツネを拝むのか キツネはカミサマなのか」というような疑問はわかかなかった、周りの人々が自然な姿勢で拝んでいたからだろう。ただここまで大々的なものが民間信仰なのか、普通のお宮さんに参拝するのと違わないというより、これは普通のお宮さんじゃないのかなともおもうが、考えてみれば「なんで キツネ」唐突な登場に面食らっているのは近代人だけ、昔話には キツネにタヌキ、いまや嫌われモノのカラスもよく登場するが、ま、おかしいよね。

佐代姫神社の巫女：その巫女は85歳、腰が曲がり長年の農作業でふしくれた指をして、ちゃんちゃんこを着た普通のおばあさんだった。彼女の話す言葉は島原弁で三分の一ぐらいは私にはわからない。あいさつなどの会話の時は、もの静かにていねいな口調で話してくれる。しかし話が信心のこととなると、熱気を帯び、目の光がまし、身振りをまじえた早口になる。信心の話になると、ていねいな話しぶりは消え、すべてのことを断定し、言い放つ。身をのりだし説きかけてくるのに圧倒され後ずさりをしかかる気分になる。たじたじとするわたしに、さらにことばの弾丸が放たれ、首根っこをとらえてひきもどし、説き伏せる。日常の巫女の物腰からは想像もできないような、カリスマ的性格が現れる。信心のはなしは巫女がしゃべっているのではない。巫女の祭るカミが巫女に話させているのである、巫女は話のつじつまあわせよりも、次々ほとぼしるカミの意向を口に出すのがせいっぱいなのかもしれない。巫女の背景にあるカミがなにを凡夫に伝えたいのか、ということが大切である。巫女の予言能力が人々に知られ、なやみごとの相談にやってくる人がぼつぼつ出はじめる。たとえば医者に言ってもはかばかしくない病人が訪ねてくると、病気で痛む身体場所に霊が現れ、どうしたら状態がよくなるかをお告げするのである。こうして巫女としての道をあゆみはじめる。彼女のもうひとつのすごみは「世直し」の思想につらなる言動にある。第二次大戦中“天のカミさま”が巫女にお下がりになって「日本はカミの国であるというが、今あさましい畜生の世になっている。戦争のような悪いことをせずに、みなが日の丸のように丸くならなければいけない」対岸の都市が空襲で炎上するのを見て「天をうらむな、敵をうらみにおもうな、国のバイキンを爆破してくれるのじゃ。どうぞ焼いてください、ご苦労様です。東洋平和のためにつくしてください。わたしたちにつくしてくれるための炎もありましょう。死もありましょう。ひもじいこともありましょう。どうぞはやくこの国をしずめてください」「明治の天皇さんは強欲な戦争ばかりした。そのたたりで大正天皇は肺病やみになった。昭和になってもたたんがつづき、畜生の世にむかっている」終戦後は「あの巫女さんは先々を見通しておられた」とうわさされた。

オレは巫女さんのようなヒトに会ったことがない。会いたいような、会いたくないような。